

都市的共同性とは何か

都市人類学的研究の可能性をめぐって

佐 藤 知 久

キーワード：都市人類学 コミュニティ 共同性 空間

はじめに

現在では、全人類のほぼ半数が都市に住み、世界で1日に約25万人の新たな都市住民が誕生しているといわれている。都市人口は、1900年には全人口の13%に過ぎなかった。大規模な都市化の進行は、20世紀以後のものである（ロジャース 1997＝2002：4, Smart and Smart 2003：265）。

都市への人口流入と都市圏の拡大は、さまざまな問題を生みだしている。荒廃した都市環境を「再開発」するジェントリフィケーションによって都市「整備」が謳われる一方で、近い将来には産業廃棄物になるかもしれない、長期的な有用性をもたないその場かぎりの「ジャンク・スペース」（Koolhaas et al. 2001）は、拡大をつづけている。環境問題、不足する住宅、増大する犯罪、貧富の二極化、国内外からの移民問題等、都市において解決されるべき問題は山積している。都市社会に関する研究の必要性は、これまでになく高まっている。しかしながら、こうした都市問題を解決することは——そしてそれら問題を生みだす源としての〈都市〉なるものを理解することは——容易ではない。現代都市は物理的に巨大であり、しばしば世界レベルでの諸現象と接続しつつ成立している。たとえ

ばニューヨーク市を「理解する」といっても、800万を越える住人の生活をくまなく知ることなど不可能に近い。ニューヨークを舞台に活動する企業についてはいうまでもなく、その住人たちが、合衆国内のみならず、カリブ海・南米・アジア諸国といった諸外国とのあいだにはりめぐらしている膨大なネットワークをも理解するとなると、考察すべき対象は、ほとんど地球規模に拡大してしまうのである。

この小論の目的は、このような都市を——あるいは都市研究を——めぐる状況において、文化人類学的研究手法が、どのような役割を果たすことができるのかを考察することにある。文化人類学の研究手法であるフィールドワークは、その本性上、小規模な人びとの集まりにしか適用することができないが、そのぶん、人びとの経験について詳細に知ることができる。こうした手法は、都市という膨大な現象について、どのような知見をもたらしてきたのか。そして今後、どのような知見をもたらさうのか。これらの問いに答えることは、文化人類学にとって急務である。

もちろん、こうした問いに包括的に答えることは、この小論では不可能である。幸いなことに、人類学の立場から都市研究については、すでにいくつものレビューが行われている（松田 1987, 和崎 2003,

Low 1999, Sanjek 1990, Smart and Smart 2003, Southall 1973)。そこで本論では、前述の問いを限定し、文化人類学的手法が、都市という対象にどのようにアプローチしてきたのかに議論を集中させようと思う。いいかえれば、文化人類学は都市をどのような理論的背景のもとにとらえようとしてきたのか。人類学的手法は、都市をどのような社会として描き、どのような地点から都市社会・都市生活について論じてきたのか。それを明らかにしたい。特にその際、都市社会にみられる人間のつながり——それを都市的共同性と呼びうる——が、都市人類学においてどう扱われてきたのかに、本論は着目する。もちろんこうして限定された問いについてさえ、その答えは、論者の数だけあるだろう。本論の目的は、この問いに対して、筆者の視点から一定の応答を提示することにある。

都市を研究対象とする文化人類学は、通常「都市人類学」と呼ばれる。論者によって意見の差はあるものの、都市人類学はおおよそ1950年代から60年代にかけて出現したものである。以下では、都市人類学における都市へのアプローチとそこでの理論的背景について、ロウが用いた区分を援用しつつ、考察をすすめる。具体的には、都市人類学における基本的視座を、おおまかに2つのパラダイムに分ける。すなわち、第一に「社会組織のパラダイム a social organizational paradigm」であり、第二に「政治経済的パラダイム a political economy paradigm」である (Low 1999: 4)。

以下ではこの区分に沿って、まずは第一のパラダイムについて概観することから議論をはじめよう。

1. 社会組織のパラダイム

都市内小コミュニティ研究

都市人類学のパラダイムは、長いあいだ基本的に、都市内における小規模な社会組

織、あるいは社会的ネットワークを研究することにあつた。これは、より大規模な統計情報にもとづいて都市を分析しようとする、他の学問における都市へのアプローチ方法と対照的である (Gulick 1989: xv)。

この対照性は、もちろん、文化人類学的研究の(理論的かつ方法論的な)伝統に関連している。「都市の社会生活における、独自の社会関係とパターンに着目しながら、都市の社会組織を検証」(Barfield 1997: 479)する領域である都市人類学が出現した1950～60年代は、構造機能主義に代表される、人類学的研究の全体像に関する理論整備が、一定程度完了した後にあたる。ここでは、対象社会が他の社会から自立した社会組織ないし文化をもつことが暗黙のうちに前提されており、人類学者の使命は、その社会組織あるいは文化のありようを、その社会の内部の視点から全体的に理解することにあつた。対象社会をひとつのコミュニティ(共同体)としてとらえることは、当時の人類学にとって、基本的な出発点だったのである。

こうした潮流のなか、人類学的な都市研究が、都市内における小規模な社会組織の研究というかたちをとろうとしたのも当然であった。人類学的都市研究の基本的視座は、近代人類学の研究単位となった「小コミュニティ」に該当する集団を都市の中に探し、そのひとつひとつをフィールドワークの対象単位として設定することで、それらひとつひとつのコミュニティについて、その文化的自律性を詳細に研究していくことにあつた。そこに典型的にみられたのは、エスニックな地域社会からマルチエスニックな都市社会に参入した個々人が、みずからのエスニシティをどう維持／あるいは廃棄していくか、という問題構成である。こうした視座の妥当性を検証していくことから、都市人類学はスタートした。

小コミュニティ研究と都市性

初期の都市人類学におけるこのようなアプローチは、都市研究というより広い文脈からみると、都市社会学におけるアーバニズム論に対する一種のアンチテーゼとして位置づけることができる。ワースに代表されるアーバニズム論は、都市社会における人びとの生活様式を、皮相的・匿名的・一時的・功利的であり、親密な相互認知を欠いた、時に略奪的なものですらあるもの（ワース 1938=1978）として描いた。それに対して小コミュニティを対象とした都市人類学は、都市社会にも共同体的なつながりが色濃く残っていることを主張したからである。

だが実際には、シカゴ大学を中心とした都市社会学派においても、アーバニズム論は「反アーバニズム」的感情のもとに論じられてきたものだった。そのことは、アーバニズム論が、都市的な生活（あるいは少なくともその部分）を、問題含みのいわば劣ったものとして描くレトリックにも現れている。そこでは、都市は農村的コミュニティに比べて、「非人間的なもの」、深みと継続性を欠いた自己中心的なものであり、改善されるべき対象としてとりだされる。グリックはこの点に関し、都市を批判し農村コミュニティを称揚する、このノスタルジックな感情の根底には、以下のように大別される「両極化された道徳的モデル」があると述べている。

「農村」	「都市」
コミュニティ	非コミュニティ
自然	偽の
部族社会	大衆社会
道徳的	墮落的
等身大の	非人間的な
パーソナルな	匿名の
統合された	無秩序な
神聖な	世俗の
未開の	文明化された
素朴	洗練された

本質的に安定した 同質的 本質的に変化している 異質的
(Gulick 1989: 9)

こうした二項対立と、そこに付随する、都市を不完全なものとする研究者の感情が、都市人類学に無縁であったとは思われない。初期の都市人類学は、都市のエスニシティに着目しつつ、都市にも村がある（“urban village”）、都市民は脱部族化する、あるいは再部族化するといった議論を生んだが、これらの議論は形式的にみて、初期の都市社会学が問題にしたアーバニズム論と通底している。農村から都市へと流入する新都市民たちが、それまでの民族的アイデンティティを脱ぎ捨てていけば一度裸になり、新たに都市民としてのアイデンティティを獲得していくという脱部族化論の問題構成はアーバニズム論と同型であるし、また再部族化論は、このテーゼに対する反証を、実証的研究を通じて示したものである¹⁾。人類学的都市研究は、都市社会を、主にエスニシティを核とした「コミュニティである／でない」という分析格子によって、別のいいかたをすれば、農村社会をモデルとした視点から、分析し理解しようとしてきたのである。

1897年生まれワースや、彼の同僚であり同じ年生まれの人類学者ロバート・レッドフィールドらにとって、農村あるいは民俗社会が侵食され失われつつあることは、現実に目撃しえた出来事であったにちがいない（かれらは柳田國男と宮本常一のあいだの世代にあたる）。その状況と立場において、かれらが農村社会の消滅を嘆き、農村社会により高い道徳的価値を与えたことも理解できる。だがそれから70年後、急激に拡張しつつあった極東の都市に生まれ育った（筆者のような）人間にとっては、事情は大きく異なる。そこでは、「皮相的・匿名的・一時的・功利的」な都市社会こそが所与の生活条件であり、それに対置する

ものとしてイメージされる農村的コミュニティの方が、社会形式としては遠くに感じられるものとなっている。私事になるが、私が育ったのは、東京都下、1960年代に畑をつぶして造成された団地町であり、人口のほとんどは1960年代以後に流入した住民によって構成されている。こうした環境においては、都市を「都市内のコミュニティ」の集合とみることも、「皮相的・匿名的・一次的・功利的」な断片的人間関係の束としてみることも、生活の実感にそぐわない。

たしかに初期の都市人類学研究は、都市社会のなかに濃密な民族的・文化的コミュニティを追求めることによって、都市生活の一面を着実にとらえることに成功した。都市社会における人間関係は、ずたずたに寸断され個へと断片化しきったものではない。だが他方で、そこに存在するコミュニティから都市をみることは、都市をそれら諸コミュニティによって構成されるモザイクとして描くことにつながってしまう。そのときそれら諸コミュニティが並存することの意味や、各コミュニティのあいだに在るであろう交流可能性は、少なくとも議論の中心から外されてしまう。

自らの「伝統」や「コミュニティ」と呼ぶものを、集合的に持たない人びとの存在は、都市コミュニティ論においてどのように位置づけられるのだろうか。都市生活において、皮相的・一次的な関係が個々人において持つ意味は、そこでどのように位置づけられるのだろうか。ひとつの都市の物理的境界を越えて広がる人びとのネットワークに代表される、都市とその外部との関係は、そこでどう論じられるのだろうか。1970年代までの都市人類学は、都市生活の秩序や人びとのあいだの連結性を強調するあまり、つかのまのわずかな接触によって生まれる社会的関係について、ほとんど探求してこなかった (Sanjek 1990: 152)。ゴッフマン (1963=1980) が都市の

公的場面においてなされる日常的相互行為論を分析したような視点が、都市の民族誌に適切に接続される必要があるのである。

もちろん初期の都市人類学に、こうした視点がまったく欠如していたわけではない。問題なのは、都市社会をどのような視座のもとにとらえるかという、基本的な理論的分析枠組みである。都市社会を小コミュニティのモザイクとして描くとき、都市での匿名性や流動性をもつ積極的な意義、あるいは自己のコミュニティに属さない隣人や他者との関係といった側面が軽視されてきたことは否めない。初期の都市人類学は、都市内のコミュニティに着目することでいわば都市を農村化し、都市的な生活実践の積極的な意味をめぐる探求は、後景に退いてしまっているように思われる。

2. 政治経済的パラダイム

小コミュニティ研究の臨界

「社会組織のパラダイム」に変わって1980年代に登場したのが、すでに言及した「政治経済的パラダイム」である。これは、「産業資本主義の社会的影響を検証し、アーバニズムと不平等や疎外との混同を解体することによって、都市なるものを理論化しようとする」ことによって、「都市的な経験を形づくる構造的な諸力について、批判的な研究」を行う立場である (Low 1999: 4)。いいかえればそれは、都市的経験の特性——皮相性や功利性、人間関係の断片性——を、資本主義経済との関連において見なおすものである。さらにそれは、都市的生活にみられる不平等について、批判的観点から考察するものである。

都市人類学におけるこうしたパラダイムへの移行は、ロウによれば、スッサー (Susser 1982)・ハネルズ (Hannerz 1980)・マリングス (Mullings 1987) らの著作によって代表される。これらの著作が現れた1980年代は、人類学の大きな転換期

に対応している。それは、非都市社会をフィールドとする人類学者たちにとっても、もはや「農村」に代表される孤立した小社会だけを見つめることが不可能となりつつある時代であった。どれほど隔絶したかにみえる社会においても、国家や都市との関係がそこにじわじわと入り込んでいる。1980年代の人類学において、個別の小社会を閉じた構造として理解する風潮は衰退した。かわりに、国家や他民族、そして首都や他国の都市との複合的関係のなかにあるものとして、地域のコミュニティを理解す

ズルー、ティモール島人、ナミビア人、ニカラグアのメスキート、クルド人、アフガン人、レバノンのマロン派とシア派といった人びとを、我々とは完全に異質な自足した諸文化として扱うことは、たとえそれが人類学の伝統的分析単位——文化——を定義するためであったとしても、もはや不可能である。新聞の読者やテレビの視聴者はみな、これらの人びとが、自分自身の社会にも影響を及ぼしている、世界の一部分であることを知っている。だからこそ民族誌は、対象の歴史的文脈をこれまでよりさらに正確に把握できなければならないし、フィールドワークが通常行われる地域レベルにおいて、非人格的な世界規模の政治的・経済的システムが、いかに内在的に働いているかを記録できなければならない。こうしたシステムの働きを、地域的で自足した諸文化に対する外からのインパクトとしてのみ見なすことは、もはやできない。むしろ外的なシステムは、すでに完全にその地域の内側から定義され、そこに浸透しているのであり、民族誌の対象とされた人びとにとって最も親密な生活世界の内部において、象徴と共有された意味を形作っているのである。最も一般的な概観的把握を除いて、伝統と近代の明瞭な区別は、現代の民族誌的分析においてほとんど重要性を持ちえない (Marcus and Fischer 1986=1989: 39=85-86. 引用に際し邦訳の語句を若干改めた)。

ることの必要性が認識されたのである。

マーカスとフィッシャーが伝統と近代の

区別に与えたのと同じ意味において、1980年代以後の人類学では、都市と農村の区別を互いに排他的なものとして維持することは困難になった。1960年代にアンソニー・リーズは、いかなる都市も孤立した島ではないと述べたが、今や「いかなる小社会・農村も、孤立した島ではない」といいうる。都市社会がその周辺地域や他の都市、そして国家や他の国家との関係において成立する複合的なものであるのと同様に、どれほど孤立したかにみえる農村にも、外部経済は浸透していく。ほとんどすべての社会が自律し閉じた社会ではなく、複合社会であるような世界に、私たちは暮らしている (Southall 1998)。サンジェク (Sanjek 1990) はリーズの主張のなかに、初期の都市人類学の死を読み込んでいるが、マリノフスキーに始まる閉じた小社会研究としての人類学もまた、この時期に一種の死を、そして次なるステップへの再生の契機を迎えたのである。

それではあらためて、都市とはいったい何なのだろうか。たしかに社会は複合的であり、ほとんどの農村社会は都市社会との関係をもつ。だが同時に私たちは、生活者として日常的に〈都市〉を意識している。〈都市〉に住んでいる、あるいは住んでいないと感じ、〈都市〉とそれ以外の社会を想像的に区別している。都市人類学は、社会の複合性をふまえた上で、あらためてもう一度、「都市」あるいは「都市社会」として生きられ、意識されるものが何なのか、その意味を経験的かつ理論的なレベルで、問いなおさなければならない²⁾。

自律的かつ閉じた共同体像をモデルとしてつつ研究をつみかさねてきた人類学が、その理論的枠組みを批判的に受けとめたとき、都市はどうとらえられていったのか。以下ではニューヨーク市を対象とする2冊の民族誌の内容を検討することで、都市人類学における社会組織パラダイムから政治経済的パラダイムへの移行をあとづけつつ、こ

の問題を考察してみよう。

民族誌的事例〔1〕都市内労働者階級における共同性

まず、前述したスッサーの民族誌 (Susser 1982) をとりあげる。これは、ニューヨーク市ブルックリンの、グリーンポイント・ウィリアムズバーグ地区についての民族誌である。調査地の性格および、著者がそれを記述する際の方針について、スッサーはまず次のように述べている。

「民族的な分離居住 [がこの地域に見られること] は明らかであるが、にもかかわらずほとんどの近隣地域は、きわめて非同質的なものである。…ポーランド人やイタリア人の [主に居住する] 地域を同定することは容易だ。しかし、さまざまな背景をもつ他の多くの人びともまた、これらの近隣地域に実際に住んでいるのである。本書では、民族的な区別を検証するよりもむしろ、自分たちがニューヨーク市のなかで類似した経済的立場にあることを見いだした諸集団のあいだに存在した、いくつかの共通性 commonalities について、記述していこうと思う」(同書:25)。

この引用部分には、都市社会に対する人類学的な視線の変化が、明瞭に記されている。この本の主な舞台となるノーマン通り周辺は、主に、ポーランド系・イタリア系・ユダヤ系の白人と、プエルトリコ系・ドミニカ系のヒスパニックが混住する地域である (といっても、これら各民族集団間での婚姻も多く、個々人のレベルではしばしば民族的アイデンティティがあいまいになることを、著者は例をあげつつ詳細に記している)。著者は、民族的分離居住を同定することは容易だと述べつつも、それぞれのエスニック・コミュニティごとにみられる、文化的・社会的特性のみに着目しようとはしない。スッサーが焦点をあてるのは、比較的貧しい労働者としてのかれら (家賃や交通網といった経済的諸条件は、この地域に居住可能な人びとを選別する) のあい

だにみられる、労働者階級の住民としての共通性である。

調査が行われた1975～78年は、ニューヨーク市の財政が破産の危機に直面 (その結果として行政サービスの一部が停止) した直後であり、市の産業構造が大きく変化しつつあった時機にあたる。この政治経済的な構造的変化は、一方で、マンハッタンの中心部を高所得者の町へと変えながら都市の「再開発」を加速し、ニューヨークを世界経済の「司令塔」たる「世界都市」へと飛躍させていった。しかし、調査地域においてこの変化は、地域から製造業が撤退したことによる失業の増加、土地再開発のための家主による意図的な家賃の高騰、結果として生じる住宅環境の悪化・景観の破壊、ならびに一部住民たちの社会保障への依存という形で出現した。都市の産業構造の変化と、行政組織の財政状態ならびに (特に人的サービスに関する) 政策の変化は、そこで働いていた労働者の生活に打撃を与え、かれらの生活をきわめて不安定な状況に追いやっていった。民族誌の前半で丁寧に確認されるのは、民族的境界を越えたこのような政治経済的な立場の共通性を、この地域の住民がもっていたということである (同書:Chapter 2～6)。

著者が次に着目するのは、人びとがこうした困難をどのように生き抜くか、という問題である。個々人にとっては制御不可能な外的諸要因がもたらした、かれらの生活における苦境に対して、住民たちは、その住み処であるノーマン通り周辺を基盤とした「ブロック・アソシエーション」(同じ街区に住む人びとの町内会的組織) を形成して抵抗した。この組織についてスッサーは、主に次の3点を指摘する。

①日常的な近接性を基盤とした組織形成

ブロック・アソシエーションは、路上での日常的やりとりの関係を延長するかたちで創設された。組織の核となったのは同じ通りに住む女性たちであり、主要メンバー10人のなか

には、ひとつの家族関係によってつながれた5人の男女と、その隣人たち3人が含まれている。全主要メンバーに唯一共通しているのは、ノーマン通りという街路に沿って暮らしているということであり、かれらの民族的背景は多様であった。(同書：103-121)

②「人種」的対立と日常的接触

一方で、ノーマン通り沿いにあるバーや路上では、黒人およびヒスパニックに対する人種差別(身体的暴力や、放火による近隣からの追い出し)が生じていた(この地域には黒人居住者がほぼ皆無である)。しかし、アソシエーションのメンバーは、こうした対立の影で、あらゆる民族集団に属する個々人との社会的な接触を保っていた。(同書：121-123)

③日常的な相互行為の重要性

ブロック・アソシエーションのメンバーシップや、その活動が拡大するプロセスにおいては、「その人を知っているか」どうかが必要な役割を果たしていた。たとえば、初めて組織のミーティングに参加しても、「通りで知っている」相手同士なら会話が始まるが、逆の場合はそうではない。ただし新参者へのこうした無視は、しばしば人種主義的差別として受け手に解釈された。(同書：125-127)

ノーマン通りの住人たちは、失業というかたちで、都市経済の構造的変化の影響を同じように受けていた。家賃が払えなくなった住人たちは、親族ネットワークや社会保障を利用して急場をしのぐ。だが、事態がそれ以上の規模で周囲に広がっていることに気づくと、かれらは親族ネットワークや民族的アイデンティティを越えた組織形成をはじめたのである。自分たちの苦境に対処しようとするなかで生まれたこのような新しい共同性は、この民族誌において、これまでの都市人類学が強く着目してきた個々人の民族的アイデンティティではなく、路上に代表される日常的な活動空間における〈やりとり〉、つまりそこで相手を〈見知っているかどうか〉を契機に形成される

ものとして描かれている。

こうしてスッサーの民族誌は、都市における生活と経験が、人びとが資本主義経済の階級構造のなかでどのような位置に立っているか、そして行政組織の政策が人びとの生存戦略に対してどう影響を与えるかによって条件付けられ、形作られることを示す。資本主義経済における構造的な位置は、人びとの生活を同型的に形作る諸条件であり、逆にいえばこの条件こそが、人びとが都市のどの地域に住むかという選択に影響を与える。スッサーの民族誌は、このような同型的経験をもつ人びとが新たな社会的組織化を行うとき、街路という公的空間において互いを日常的に見知っていることが重要な役割を果たすことを示している。彼女の民族誌によれば、このプロセスにおいて重要なのは、互いに日々出会ったり、あいさつを交わしたりしていたかどうかという、いわばきわめて皮相的な経験の積み重ねである。この経験の背景に、民族的アイデンティティの同一性は必ずしも存在しない。かれらをつなぐ基盤となるのは、通りでの一時的で皮相的なやりとりという都市的経験である。

この過程に私たちは、同じ民族的アイデンティティや、文化的に十全な同質性によるのではない共同性——それを都市的共同性と呼ぶことができる——のあり方の一例をみることができる。もちろんスッサーは、民族的アイデンティティがしばしば、こうした共同性の創出をさまたげる葛藤の起因となることにも注意している(同書：Chapter 7)。しかしスッサーの民族誌は、都市社会が、人びとの意識にある「人種」的・民族的アイデンティティの影響を強く受けつつも、それら諸アイデンティティが区分する境界をのりこえて、日常的なやりとりを基盤とした共同性が生まれてはまた改変されていくような社会であることを、例示しているのである。

民族誌的事例〔2〕地区レベルにおける共同性

つぎに、スッサーの民族誌の16年後に出版された、ニューヨーク市クイーンズのエルムハースト・コロナ地区に関するサンジェクの民族誌 (Sanjek 1998) をとりあげよう。同地域はそもそも、白人 (現在の同地域における人口は約3万人) を主な住人とする住宅地域だったが、現在では、ヒスパニック (7万)・黒人 (1.5万)・中国人を中心とするアジア人 (4万) などがある。いついぞう住みこんだ、もともとのマジョリティ (白人) とマイノリティ (いわゆる「ピープル・オブ・カラー」) の量的立場が逆転した、民族的に多様な住宅地区となっている。

本書をまず特徴づけるのは、その調査期間の長さ、チーム形式で行われた調査方法であろう。著者自身のフィールドワークは1983年から96年という長期間に及ぶ。共同調査者 (そこには学生も含まれる) を複数得ることによって、著者らの研究チームは各人の言語的能力を生かし、中国人・ヒスパニック・白人・黒人・インド人といった人びとへの参与観察を行っていった。巨大化する都市を研究する上で、このような研究手法はきわめて有用である。なぜならそれは、フィールドワークの利点を生かしつつ、その欠点である調査対象の狭さを取り除くからだ。

ただし、こうした手法をとったのは、スッサーの民族誌におけるのと同様、個々の集団を個別のコミュニティとして描き、それらを単純に足した和としてこの地区をとらえるためではなかった。本書において検討されるのは、「エルムハースト・コロナにおける、ディストリクト [地区] レベルの政治的領域のなかに出現した、人種間的な関係の全貌」であり、「個々の調査者は特定の人びとのなかで参与観察とインタビューを行ったが、私たちに共通の関心事は、それぞれの [人種・民族的] 集団のあいだ

にある相互行為であった」 (同書: 4-5)。著者らの焦点は、人種や民族といった境界によってこの地区を細分化したうえでそれら諸集団についての言説を生産することではなく、区分けられた集団として見られてしまいがちなそれら諸集団のあいだに、どのような相互行為があるのかを明確にすることにあったのである。

こうした構成の背景には、サンジェクが述べるように、ジェーン・ジェイコブズが描いた〈都市〉のモデルがある。ジェイコブズはかつてアメリカの都市について、^{ネイバーフッド}近隣を、^{ストリート}①都市全体②街路③^{ディストリクト}地区という3つのレベルに区分し、住民による都市の自己統治という観点からこれら近隣のレベルについて論じた。「都市全体」とは、文字通り一つの都市としてイメージされる空間全体のことである。それは人びとが仕事や買物に出かけたり、同好の士と出会うような広い範囲に及び、その都市全体の政策が決定されるレベルでもある。「街路」とは、日常的かつもっとも直接的な相互行為の場であり、自己統治の観点からみればもっとも不可欠なものであるが、しばしば他の街路を基盤とする近隣集団からは隔絶され、また政治的にも非力なレベルにとどまっている。最後に「地区」とは、「絶対に不可欠でありながら生まれながらにして政治的に無力な街路と、もともと強力な都市全体とのあいだを媒介する」ものである。^{ディストリクト}「地区は、ひとつの都市の資源を、それが必要とされている街路にまで降ろし、街路での現実生活の諸経験を、都市全体の政策と目的とに翻訳するための手助けをする」。だがジェイコブズは、このレベルこそ、「典型的にわれわれがもっとも弱く、もっとも破壊的に失敗」してしまっているレベルだと述べた (Jacobs 1961: 117-123)。つまりジェイコブズは、日常的な近隣空間である「街路」と、いわゆる都市的生活圏としての「都市全体」とのあいだが分離していることを指摘し、両者をつなぐ

(人口でいえば10万人程度の) 中間的な、地区レベルでの都市内組織の活性化と、その媒介機能の復権を主張していたのである。

ジェイコブズが主張した地区レベルの重要性は、1970年代のリンゼイ市政における「コミュニティ・ボード³⁾」の設立という形で、部分的に実現した。サンジェクは、このコミュニティ・ボードでのやりとりや活動をも、主要なフィールドワークの対象としている。かれらの研究チームが個々の言語＝民族集団ごとに調査を行いつつも、それら集団間の相互行為に着目したのは、ニューヨークという都市における、このような地区レベルでの活動に焦点をあてることを意図してのことだったのである。

この点からすればスッサーの民族誌は、文字通り街路のレベルでの活動に焦点をあて、街路レベルでのやりとりから生まれた共通性としてのブロック・アソシエーションの活動を記述し、それと都市全体との関連を一気にとらえようとしたものだったといえる。サンジェクの研究はこの流れを発展的に補足するものである。つまりそれは、街路レベルで構成された日常的・直接的な共通性が他の共通性につながるプロセスを、コミュニティ・ボードや他の市民組織といった中間的・媒介的な組織を視野に入れることによって明確にし、日常的な相互行為が、民族集団や直近の生活圏を越えた、より広い規模での共通性へとつながっていくさまを記述したものだといえるだろう。サンジェクはこのプロセスを、親密圏たるプライベートな領域で生まれる「自己紹介・冗談のやりとり・友情」といったレベルから始まり、街路＝地域レベルで形成されるブロック・アソシエーションやコープ住宅アソシエーションを経て、地区レベルでの活動であるコミュニティ・ボードへと至る一連の流れのなかにあるものとして記述している。こうしてこの民族誌は、ごく狭い領域でのささいなやりとりに始まる人間関係が、いかにより広い領域での活動にまで

媒介されていくのかを、豊富な事例をまじえつつ記述していくのである。

人類学的なフィールドワークが得意とする、こうした「下からの」記述は、この民族誌の第二の特徴である「上からの」記述に補完されることによって、さらに厚みを増している。

すでに言及した点に加えて、サンジェクはかつて、1970年代までの都市人類学の欠点として、貧民や移民についての研究にくらべて中流・上流階級の研究が少ないこと——人類学者は「上から研究する」ことがない——、また世界システム論的視点が欠如しており、研究が世界的な移動や資本の再編に関する歴史的分析のなかに置かれていないことを指摘していた (Sanjek 1990: 152)。こうした欠点を補うように、本書の導入部約1/3は、「エルムハースト・コロナ、1652-1960」「ニューヨーク市の社会秩序」「ニューヨークにおける3つの経済」「市長のイデオロギー」といった、フィールドワーク以外の歴史的資料等を駆使した、より広い文脈からの鳥瞰的な記述にさかれている。そこでは、現在の都市研究において活発に論じられている世界都市論的分析⁴⁾と、フィールドワークから得られた知見との接合が試みられている。

サンジェクによれば、ニューヨーク市の経済構造は、そこに暮らす都市住民たちに深刻な影響を与えている。一方では、貨幣・証券のグローバルな交換にもとづく「投機的——電子的経済」が繁栄を謳歌しているが、こうした産業はその性質上数多くの雇用を必要とせず、またその利潤は、アメリカ全土・世界規模に分散してしまう (しかし政党などへの寄付を通じて、政治への影響力は維持される)。住人の大多数を雇用していた、商品やサービスなど日常生活の基本材を生産・提供する「現実経済」は、郊外への企業移転と経営の合理化によって、市民の雇用を減少させた。結果として成長したのは、脱税や帳簿外^{オフ・ザ・ブック}の仕事に代表され

る「地下経済」である（そこには、フレアマーケット、行商、廃品回収、不法アパート、搾取工場、賭博、自動車強盗、薬物売買、売春などが含まれる）。調査地区にみられる「生活の質」の低下は、こうした政治経済的構造の変化という文脈のなかに位置づけられ、世界都市ニューヨークが構造的にもつ諸条件に規定されたものであることを、サンジェクは主張するのである（Sanjek 1998: 119-140, 185-212）。

歴史学・政治学・経済学といった「大きな」議論と、観察可能な「小さな」場所でのフィールドワークにもとづく知見を相互に貫入させることで、異なるレベルで行われている議論の質を上げていく必要性は、1980年代以後しばしば指摘されてきた（Marcus and Fischer 1986）。その意味でサンジェクの民族誌は、都市社会における観察可能な生活実践と、より大きな政治経済的状况をめぐる認識とをつなぐ議論の好例ともなっている。

3. 考察：都市的共同性の創出

以上私たちは、都市人類学の初期から1990年代に至る都市人類学的研究のパラダイム・研究手法、そしてそこから生じる含意について検討してきた。これまでの議論によってその移行は、以下のような諸点へ整理できるだろう。

①都市住民の生活は、資本主義経済における位置や政治的状况の変化に応じてつねに条件付けられ・位置づけられるがゆえに、またしばしば（エスニシティに代表される）個々人のアイデンティティが異なるがゆえに、互いに分断されるが、政治経済的状况はまた都市住民のあいだに構造的な同型性をつくるものでもあること。

②それゆえ、都市社会においては、共同性があらかじめ確定的に存在し、継承されていくのではないこと。しかしながら、都市社会における共同性は、対面的な相互行為を基盤と

して、日々創出されつづけるものでもあり、それゆえ都市社会研究においては、このような共同性の創出プロセスにまずは着目し、それを記述する必要があること。

③都市社会は、幾層もの生活圏が複合した社会であり、都市研究を行う上では、それら生活圏のどのレベルに研究の射程を合わせるのかが重要であること。人類学的手法たるフィールドワークは、もっとも日常生活に近い相互行為のレベルと、それらのあいだを媒介する生活圏のレベルに対して、適切かつ有効な研究手法であること。

1980年代以後のこうした変化、都市人類学における「社会組織パラダイム」から「政治経済的パラダイム」への移行は、都市住民をとりまく資本主義経済や、国家・行政組織による統治をも視野に入れるという関心の拡大だけではなく、都市なるものをどのように捉えるかという点における、一定の理論的前進を含むものである。後者のパラダイムにおいては、都市社会が、階級やアイデンティティ、ジェンダーや教育によって分断されていること、そして都市社会自体が、隣接地域や農村社会、さらには世界経済とも接続された複合社会の一部であることが、議論の出発点となっている。80年代以後の都市人類学は、このように分断され断片化した都市住民の生活、それでいて当該する都市空間以外の空間へと広がる関係性のなかにある都市社会という複雑な現実性をふまえたうえで、都市住民たちが新たに作りあげる組織や運動に着目し、その発生と維持のプロセスに焦点をあててきた。そうすることによって都市人類学者たちは、一定程度の断片化を被りながらも、人びとが新たなつながりをつくりだすことを指摘してきたのである。

本論ではあえて、こうしたつながりを「共同性」の語で呼んできた。一般に共同性（community）とは、観念・規範・慣習・伝統・帰属意識などが共有された状態をさすことばである。それは、「社会」の

語（個々人の自律性が含意される）に比べ、人びとのあいだに共有されたものがより多く、どちらかといえば伝統的で、濃密な人間関係を示す。にもかかわらず本論が共同性の語を、ブロック・アソシエーションや街路でのやりとりといった比較的「薄く」みえるような関係について用いたのは、アーバンイズム論が指摘したような都市的人間関係の否定的特徴とは異なる、こうした現象の積極的特質を明確化するためである。

現代の社会における人間のつながりかたについては、これまでしばしば、それが地域にねざした伝統的な共同体としてではなく、共通の関心を軸とし空間的な近さを基盤としない「意識の共同体」としてあることが指摘されてきた（能登路 1993）。だが前節で紹介した2冊の民族誌が示しているのは、現代の都市社会においても、空間的な近さにもとづく日常的やりとりを契機とした集合的なまとまりが生じうるということだ。そしてそのつながりは、民族的アイデンティティや十全な文化的同質性といった、これまでの共同体論がしばしば前提する条件を欠いても成立しうる、ということだ。

この点について小田亮は、「どのような共同体にもある…関係性の多様性や個々の特異性を保持しながら隣接性にもとづいて作り出されている共同性」こそが、「〈都市的なもの〉」なのだと述べている（小田 2004a: 441）。いいかえれば、各人の差異を保持したまま、空間的隣接性にもとづいてつくられる共同性こそが、伝統的共同体を含むあらゆる共同体の根底にある、ということだ。この指摘の妥当性に関しては、ここでは判断を留保しよう⁵⁾。しかしこれまでの議論を通じて少なくとも私たちは、次のようにいいうるだろう。すなわち、「都市的共同体」とは、既存のアイデンティティや文化の同一性／異質性、政治経済的条件による分断と同型化、共通の関心＝利害にもとづく意識の共同性、そして本論

後半で紹介してきたような空間的隣接性を契機とする新たな共同性の創出といった、さまざまな条件がからみあって成立するものなのだ、と。

とはいえ、これまでの議論には抜け落ちている論点も少なくない。第一にメディアの問題、第二に、対面的相互行為や近さを基盤とする共同性からとりこぼされてしまう人びとの問題、第三に、こうした共同性の基盤となる、都市的空間のありようそのものの問題である。

第一に、スッサーやサンジェクの民族誌では、コミュニティ・ペーパーやチラシといったメディア以外の自己発信的なメディアが都市住民に与える影響が、ほとんど論じられていない。そこにはもちろん、1970年代から90年代前半にかけては上から下に向けて一方向的に流されるマスメディアの力が支配的であり、都市住民の生活圏から立ち上がってくるメディア上の表現が力を持ちにくかったという背景がある。90年代後半以後のパーソナル・メディアとネットワーク・メディアの発達、ネット空間上に、共通の関心を軸とする意識の共同体を発達させるとともに、物理的空間を介さずに個々人がやりとりを行う機会を増大させた。このことが、物理的空間を介した共同性に対してどのような関係をもち、どのような影響を与えるのか。都市人類学的研究においても、こうしたメディア環境の変化が都市社会にどのような変化をもたらすかについて、今後ますます検討されるべきであろう。

第二に、路上や公開のイベント、ブロック・アソシエーションやコミュニティ・ボードといった、オープンな場面で形成される共同性に入り込まない（あるいは込めない）人びとの問題がある。対面的な相互行為や近さを契機とした共同性が創出されるためには、いうまでもなく「対面する」ことを可能にする空間が必要である。しかし、たとえばHIVとともに生きる人びとの場

合、自身の抱える困難を、路上や町内会的な組織といった公的な場面で表明することはほとんどできない。それらの都市空間は、HIV感染という問題に関して他者とのつながりを形成する場所にはなりにくいのである。

第三に、既述したジェイコブズのいう近隣生活圏の多層性が、他の文化に属する都市においてどう空間的に定位しているかも、論じられるべき問題として残っている。たとえばアメリカ都市において街路は、個々人の私的空間・親密圏と明確に（建築的に）区別されているとともに、その歩道の広さによって、人びとがそこにおいて自由にふるまうことが可能になるような、公共性の高い空間となっている。街路が住人たちにとって共同性の場になるのは、街路のもつこのような公共空間としての性格によるのである。こうした空間特性は、私的空間と公共空間の建築的区別があいまいで、しばしばあふれ出した商品に占領され、車道に圧迫されている日本の街路空間と対照的である。

それゆえ今後の都市研究は、公共空間での沈黙を余儀なくされた人びとにとって、あるいはそもそも他者との共有空間が少ない都市空間において、都市がどのような場所である／ありえるのかについても着目していく必要があるだろう⁶⁾。特に、他者と共有され、対面的な接触を可能にする隣接的空間が、個々の文化・個々の都市においてどう組織化されているのか、そしてそれがどのように、政治経済的条件と接合されているのかという点については、今後より具体的に検討される必要がある。いいかえればそれは、都市的共同性の創出を可能にする物質的・文化的条件について、個別具体的に探求していくことである。

冒頭にも述べたように、都市はたしかにその全体像をとらえにくい対象である。だが、都市人類学的研究は、これまで検討してきたように、都市なるものが何であるの

かについての理解を前進させると同時に、都市へと至る研究手法についても試行錯誤を続けてきた。都市人類学的研究は今後も、小規模な空間や場所を対象としながらも、しかしその小規模性のゆえに生活の詳細な像を描く点において、都市社会の現実を理解するための重要なアプローチとなるであろうし、その「小ささ」をより広い文脈と関連づける方法においても、さらなる洗練を続ける可能性をもっている。

いずれにせよ、変化しつづける都市を前にして、都市社会にすでに在る秩序を共同性として分析するだけでは、もはや不十分である。都市のなかにどのように、そしてどのような共同性が生まれつつあるのか。それを研究することによってこそ、私たちは都市とは何かを理解し、そして数々の都市問題を解決するための道すじに、近づいていくことだろう。

注

- 1) 論者によっては、脱部族化でなく「近代化」「脱フォーク性」という用語も使われる。同様に再部族化論については、「アーバン・エスニシティ」「再フォーク性」といった用語も使われる（和崎 2003）。いずれも、〈農村－民俗社会－前近代〉と、〈都市－非民俗社会－近代〉とを対比させるモデルに従った用語である。さらにいえば、脱部族化論と再部族化論の対比は、根本的には社会学における「業績主義」（achieved status）と「属性主義」（ascribed status）の対立に現れている、近代人の属性をとらえるうえでの重要な概念的対比へと還元できるだろう。
- 2) この点に関する近年の論考として、関根（2004）を参照。
- 3) コミュニティ・ボードは、ニューヨーク市の行政区画であるコミュニティ・ディストリクト毎に存在する、住民と市政とのあいだを媒介する中間的組織で、区長によって任命された50人以下の無給のメンバー（当該コミュニティを代表する住人から選ばれる）によって構成される。エルムハースト・コロナの場合、この地域全体がひとつのコミュニティ・ディストリクトであり、コミュニティ・ボードをひとつ持つ。ボー

ドの責務は、住民の具体的・現実的な意見とニーズを市政に反映させるために活動することであり、毎月の公開ミーティングや、公聴会を行う。活動の内容は毎年声明文にまとめられ、市政に送られるとともに公表される。

- 4) 世界都市論は、経済学・社会学・政治学といった分野を横断する形で出現した、都市社会を隔絶したシステムとして見る視点に対する批判的考察のひとつである。そこでのポイントは、ひとつの都市を、その都市内のみへの、あるいは国内での他地域との関連のみへ着目することによってではなく、世界資本主義や国際政治、あるいは世界的文化との関連において見る点にある。世界都市論は英米系の文脈では、world city と global city という2つの語句によって、重なりつつも異なる視点から論じられている。すなわち、前者のワールド・シティ論が、世界システム論をその理論的枠組みとして、世界経済のなかでの諸都市の政治経済的位置関係に重点を置いているとすれば、後者のグローバル・シティ論は、世界経済のみならず世界文化（グローバル・カルチャー）に、諸都市が与える（あるいは諸都市にグローバル・カルチャーが与える）影響を論じるものだといえる。サンジェクの民族誌は比較的、前者との関連性が高い。
- 5) 本論執筆中に発表された『文化人類学』（第69巻2号）の特集「共同体という概念の脱／再構築」は、この議論を発展させ、「一時的・創発的連帯とはちがって持続的なまとまりをもつ」「つねに／すでに閉じられていると同時に開かれている」共同体について論じた小田の論考（小田2004b:241）や、都市集合住宅の「エレベーターや階段、エントランス」などでの「あいさつだけの隣人」関係を含む「延長されたり分割されたりして伸縮していく〈つながり〉としての共同体」に関する論考（植村2004:280, 287）を含んでおり、非常に興味深い。これらと本論での議論の関係については、また別に論じる予定である。
- 6) たとえば、拙論（佐藤2002）は、ニューヨーク市ブルックリンにおけるHIV感染者のセルフヘルプ・グループ活動を取りあげ、そこでどのように・どのような種類の共同性がつくられるのか、そのプロセスを論じたものである。

<参考文献>

植村清加

- 2004 「私たちの差異ある〈つながり〉のかたち フランス・パリ郊外におけるマ

グレブ系移民第二世代の多民族的共同体」『文化人類学』69（2）：271-291.

小田亮

- 2004 a 「都市と記憶（喪失）について」 関根（2004）所収, Pp.422-444.
2004 b 「共同体という概念の脱／再構築 序にかえて」『文化人類学』69（2）：236-246.

ゴッフマン, アーヴィング

- 1963=1980 『集まりの構造：新しい日常行動論を求めて』丸木恵祐, 本名信行（訳）. 東京：誠信書房.

佐藤知久

- 2002 「共通性と共同性：HIVとともに生きる人々のサポートグループにおける相互支援とその当事者性をめぐって」『民族学研究』67（1）：79-98.

関根康正（編）

- 2004 『〈都市的なもの〉の現在：文化人類学的考察』東京：東京大学出版会.

能登路雅子

- 1993 「地域共同体から意識の共同体へ：アメリカ的コミュニティのフロンティア」本間長世（編）『アメリカ社会とコミュニティ』所収, Pp.173-206. 東京：財団法人日本国際問題研究所.

松田素二

- 1987 「都市人類学」祖父江孝男・米山俊直・野口武徳（編）『改訂文化人類学事典』所収, Pp.309-324. 東京：ぎょうせい.

ロジャース, リチャード

- 1997=2002 『都市 この小さな惑星の』野城智也, 和田淳, 手塚貴晴（訳）. 東京：鹿島出版会.

和崎春日

- 2003 「都市に生きる人のための都市人類学：生活処方政治学」綾部恒雄（編）『文化人類学のフロンティア』所収, Pp.65-92. 京都：ミネルヴァ書房.

ワース, ルイス

- 1938=1978 「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広（編）『都市化の社会学（増補）』所収, Pp. 127-47, 高橋勇悦（訳）. 東京：誠信書房.

Barfield, Thomas, ed.

- 1997 *The Dictionary of Anthropology*. London: Blackwell.

- Gulick, John
 1989 *The Humanity of Cities: An Introduction to Urban Societies*. New York : Bergin & Garvey.
- Hannerz, Ulf
 1980 *Exploring the City: Inquiries toward an Urban Anthropology*. New York : Colombia University Press.
- Jacobs, Jane
 1961 *The Death and Life of Great American Cities*. New York : Vintage Books.
- Koolhaas, Rem, Stefano Boeri, Sanford Kwinter, Nadia Tazi, and Daniela Fabricius
 2001 *Mutations*. Barcelona : Actar.
- Low, Setha M.
 1999 Introduction. Theorizing the City. In *Theorizing the City: The New Urban Anthropology Reader*. S. M. Low, ed. Pp. 1 – 33. New Brunswick : Rutgers University Press.
- Marcus, George E., and Micheal M. J. Fischer
 1986 *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in Human Sciences*. Chicago : University of Chicago Press. (=1989 『文化批判としての人類学 人間科学における実験的試み』. 永渕康之 (訳). 東京 : 紀伊国屋書店.)
- Mullings, Leith, ed.
 1987 *Cities of the United States: Studies in Urban Anthropology*. New York : Colombia University Press.
- Sanjek, Roger
 1990 Urban Anthropology in the 1980s: A World View. *Annual Review of Anthropology* (19) : 151–186.
 1998 *The Future for All of Us: Race and Neighborhood Politics in New York City*. Ithaca : Cornell University Press.
- Smart, Alan, and Josephine Smart
 2003 Urbanization and the Global Perspective. *Annual Review of Anthropology* (32) : 263–285.
- Southall, Aidan
 1998 *The City in Time and Space*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Southall, Aidan, ed.
 1973 *Urban Anthropology: Cross-Cultural Studies of Urbanization*. New York : Oxford University Press.
- Susser, Ida
 1982 *Norman Street: Poverty and Politics in an Urban Neighborhood*. New York : Oxford University Press.

ABSTRACT

What is urban community?

History and currents in urban anthropological studies

Tomohisa SATO

This article provides a brief overview of historical, theoretical, and methodological changes in urban anthropological studies, focusing on the issue of “urban community.” The historical progress of urban anthropology can be understood by dividing it into two paradigms, “a social organization paradigm” and “a political economy paradigm” (Low 1999). The former considered a city as a complex of small communities such as ethnic groups of immigrants, and argued that urban life was not so fragmented nor impersonal as Urbanists such as Wirth (1938) once described.

The latter, which arose in the 1980’s, sees cities differently. Urban residential areas might be regarded as a patchwork of mutually segregated ethnic communities, but city-/nation-/world-wide economy and politics would cause differences and also commonalities in residents with various ethnic or cultural backgrounds. For example, as Susser (1982) describes, a communal neighborhood movement of working class residents of multiple ethnicity emerges, partly on the basis of their daily face-to-face interaction in the street which they use as a site of their daily practice, resisting a decline in their quality of life caused by the political-economic crisis in New York City during 1970’s. Sanjek (1998) also points out that community among urban residents can be developed in various fields, ranging from friendship on the street to the activities of community boards of a local district ; even the national and/or global economic and political impact divides urban population into the haves and the have-nots.

These ethnographies demonstrate that urban community emerges primarily from spatial proximity and transient contacts in a common space, despite powerful influences from factors such as different individual identities and interests, and political-economical conditions. Although issues of cyber/media environment and cultural differences of spatial organizations in other cities are less discussed within a political economy paradigm, urban anthropological studies are contributing to our understanding of contemporary cities in a changing world.